

カクタ ユタカ

角田 豊

文化学部・教授

連合教職大学院教授

博士(教育学)／京都大学

主な研究業績

●『共感体験とカウンセリング』1998、福村出版(単著)

●『臨床的共感の実際』1999、人文書院(共訳)

●『カウンセラーから見た教師の仕事・学校の機能』1999、培風館(単著)

●『自己心理学入門』2001、金剛出版(共訳)

●『自己心理学の臨床と技法』2006、金剛出版(監訳)

●『生徒指導と教育相談 - 父性・母性の両面を生かす生徒指導力 -』2009、創元社(編著)

●『ポスト・コフートの精神分析システム理論—現代自己心理学から心理療法の実践的完成を学ぶ—』2013、誠信書房(共著)

## 研究テーマ

## 共感についての臨床心理学的研究

## 概要

共感(empathy)とは、対人理解において、基本となる概念である。カウンセリングや心理療法といった心理臨床の分野では、セラピストの共感が重視され、研究がなされてきた。カウンセリングの分野ではRogers,C.R.が、また精神分析の分野ではKohut,H.がその代表といえる。他方で、発達心理学や人格心理学など、人格特性とのひとつとして「共感性」を捉える立場もある。質問紙を用いた研究や、母子観察などから調査研究が進められてきている。

私は、臨床心理学を専門とし、上記の二つの両面から共感について研究を行ってきた。自分自身のセラピストとしての経験からは、何が共感に役立つのか、あるいは阻むのかといった関心や、逆転移やイメージ体験も含めた領域をどのように生かすことが共感につながるのか、といったクライアント理解や治療関係の理解に関心が広がってきている。

また、調査研究としては、共感経験尺度改訂版(Empathic Experience Scale Revised:EESR)を開発し、人格の他の側面との関連を見る研究をしてきた。この尺度は、心理関係をはじめ看護領域の研究等に使用されることが多くなっている。

個人心理療法に加えて、学校現場や教師との関わりが多く、現職教師らとの共同研究や、スクールカウンセリングや教師へのスーパーヴィジョンなどを行ってきた。こうした学校臨床においては、教師の児童生徒理解や対応のあり方について、心理臨床の知見を応用する研究を続けている。現在は、京都連合教職大学院の生徒指導力高度化コースの教員として、京都産業大学から派遣されている。

## 応用分野

カウンセリング、学校、その他の対人援助領域